

スキヤロンの『ル・ロマンコミック』翻訳(そのⅠ)

堀 田 英 毅

は じ め に

この物語は十七世紀絶対王制下に書かれたものです。グロテスクな物語、あるいはバロックな物語という理由で、フランス文学史に於てほとんど日の目を見ることのなかったものです。日本でいうところの説話であり、道化の世界が活写されております。

紹介よりも何よりも、スキヤロンの世界を味わってもらいたいと思い拙いことは承知で日本語に直すことを試みた訳です。一挙に全てを翻訳できればと思ったのですが、吟味しつつ徐々にやってゆくつもりです。大方の御批判をあおげれば幸甚です。

第 1 部

第 1 章 ルマンの町にある喜劇役者の一行が到着する。

太陽は既に一日の行程の半分以上歩みを進めていたし、自分を運んでくれる馬車は天上の坂を巧みに利用して、思ったより速い速度で転っていた。

もしこの馬車を引っばっている馬が坂道をもっとうまく利用してさえいたら、もう数分で残りの行程を終えてしまっているはずだった。ところが馬は全力で馬車を引っばるところか、海の近いことを知らせる潮風の香をかぎ、後脚でつつ立ってはいななき、道草ばかり食ってる始末だった。その海には彼らの主人、太陽神が夜な夜な眠るといわれている。⁽¹⁾

もう少し人間風に、又知的に語れば、役者の一行を乗せた馬車がルマンの町のホール⁽²⁾に入ったのは夕方の五時から六時の間であった。この馬車は一頭の種馬に先導された、非常に痩せこけた四頭の牛に引かれていた。

その種馬の仔馬がまるで小柄な道化のように二輪馬車のまわりを行ったり来たりしていた。

馬車には大小のトランクや、色のついた天幕等がピラミッドの様に山積にされ、その頂上には半ば都会風に半ば田舎風に装った一人の娘が見受けられた。

又容姿の見事な割には不釣合なそまつな形をした一人の若者が二輪馬車の側を歩いていた。この若者は顔に大きな絆創膏⁽³⁾を貼っていた。その為片目と頬の半分が隠れていた。又、肩に大きな小銃を担いでいたが、その小銃で撃ち落した数羽の、かけす、かささぎ、小鳥を丁度肩から弾帯のようにつるし、その端には、明らかに掠奪したと思われる1羽の雌鶏と、鷲の雛をぶら下げていた。

この男は帽子のかわりに、色とりどりのガーターでぐるぐる巻きにしたナイトキャップを被っていた。この被り物は、まだ最後の仕上が施されていない、下ごしらえのままのターバンともいえそうなものであった。

又胴着といえば、灰色の安物の布でできた外套で代用していた。胴着の上には革帯が締められていた。その革帯は同時に剣をつるすのに役立っていた。剣は又、あまり長すぎるので夾叉をつけて使い易くしていた。又、古代ギリシャ、ローマ時代の主役を演ずる役者の様に、腰まである靴下をはき、その上にジョッス⁽⁴⁾をつけ腰の所で一緒に束ねていた。短靴の代りに半長靴を履いていたが、泥で踝までよごれていた。

この若者に比べ、物は良くなかったが、もう少しきちんとした身なりの老人がこの若者の側を歩いていた。

この老人は肩に低音ヴィオールを担いでいたが、体を少しかがめて歩いていたので、遠くから見るとまるで巨大な亀が後脚で立って歩いているように思われた。

どこぞの批評家が、亀と人間ではあまり釣合がとれない事を理由に、この喩に対して文句をつけるかもしれないが、私は西インド諸島に住む大亀についての話を聞いたことがあるので、この譬喩を独断で使用することにする。

旅芸人の一座の話にもどろう。一行は雌鹿の絵の看板の出ている、ジュ・ドボムのゲーム場⁽⁵⁾の前を通りかかった。ゲーム場の入口の前には、その町の重だった町人が大勢集っていた。

一行の奇抜な格好と、馬車のまわりをうろつく賤しげな手合の立てる物音のおかげで、この一行が名誉ある町内のお歴々の目にとまった。中でもラ・ラピニエールという名のこの町の治安を司る役人⁽⁶⁾が一行に近寄り、役人らしく威厳ある態度で、一行は一体何者であるか、と尋問した。

今しがた紹介した若者が、片手は小銃を担いでおり、又もう一方の手は脚に当たらないように剣を押えていた為、ターバンに手をやることもできず、やむなくそのままの姿勢で返答した。

自分達はフランス人で、職業は役者であり、自分の芸名はデスタンといい、側に居る老優はランキュヌ、そして荷物の上に鶏のようにとまっている娘はカベルヌであると答えた。⁽⁷⁾

この奇妙な名前を聞いてラ・ラピニエールの仲間の何人かが笑ったのだが、その若者はすぐそれに応じるように、カベルヌという名前は、少し才気のある人間にとっては、山とか谷とか、バラあるいは棘といった名前に比べてそれ程風変わりには思えないはずだと、つけ加えた。

このやりとりも、馬車の前方で、殴り合いの拳固の音や、ののしり声でそれまでとなった。

牛と仔馬が、門前に山積されていた秣を、勝手にむさぼったという理由で、ゲーム場の下男がいきなり馬車の御車を殴りつけたのである。しかし騒ぎはすぐ治った。それというのも、ゲーム場の女将というのが説教や晩課より芝居の好きな女で、前代未聞の寛大さで、その家畜どもに腹いっぱい食わせても良いという許しを御車に与えたからであった。

御車は女将の申し出を受け入れたのだが、さて馬や牛どもが食っている間、作者はしばらく休憩し、次の章で語ること考えることにしよう。

第二章 —ラ・ラピニエールとは一体いかなる人物なのか—

ラ・ラピニエールという男は当時このルマンという町の皮肉屋⁽⁸⁾であ

った。小さな町には必ずといっていい程この手の皮肉屋が居た。パリの町などは一人ですまなかった。各区に一人は居たものだ。

こういう私自身、成ろうと思えば自分の町の皮肉屋になっていたはずである。しかし、皆様も御承知の通り、私が俗世の虚栄を捨てて早久しい。

ラ・ラピニエールの話にもどろう。彼は拳固の音で中断されていた先の会話を再開した。「この一座にはカベルンヌとランキュンヌとそれにお前の三人しかいないのか」と若者に尋ねた。

「我々の一座は、オランジュ公やデペロン公の一座⁽⁹⁾と比べて少しもひけはとりません。ただ……」と若者は口ごもりながら「トゥールで不祥事をしでかし、と申しますのも、我々の一座の粗忽者の木戸番が、トゥールの代官の家来⁽¹⁰⁾を殺害した為、我々はとるものもとれず、御覧のいでたちで逃げてくるのがやっとだった訳です。」と答えた。

「トゥールの代官の家来達がフレッシュ⁽¹¹⁾で同じ事をやらかしたそうさ」とラ・ラピニエールが言った。

するとそれを聞いたゲーム場の女将が、「奴ら壊疽にでもかかって焼き殺されるがいいよ。⁽¹²⁾ 奴らがいるとね、こちとらおちおち芝居も見られないんだからねえ」と口をはさんだ。

「そんなこと我々にしてみりゃ、どうってことないんですがね」と傍の老優が口を切った。

「ただ、この衣裳箱の鍵さえありゃあね……そうすりゃあ、残りの者と落ち合うことになってるアランソンへ行く前に、四・五日間町の衆を楽しませてあげれるってもんですがね」

この老優の言葉はがぜん衆目の注意を引いた。早速ラ・ラピニエールは妻の古いドレスをカベルンヌに、ゲーム場の女将さんは、賭け金の抵当として客から取り上げた服、二・三着をデスタンとランキュンヌに提供した。

ところが町の衆の一人が

「三人しか居ないが、どうやって芝居をするんだい」と尋ねた。

「わたしゃね、一人で芝居一つこなしたことだってあるんでさあ。王様

と王女様、それに使者を同時にね」とランキュヌが答えた。そしてさらに次のように続けた。

「王女の役をやる時は裏声で、使者の時は鼻にかけてしゃべるんですよ、椅子にあらかじめ置いてある王冠に向ってね。又王の時は椅子に坐り直し、王冠を被り、重々しい口調で少しばかり地声をはりあげてね」

「もしお疑いでしたら我々を運んできた御車に車代を払い、我々の落着く先のホテル代を払い、皆様の衣服を提供してやっちゃくれませんかね。そうすりゃ夜になるまでに一発芝居を打って御覧にいれましょう。それに、こう言っちゃ何ですが、皆様さえよけりゃ、一杯やりがてらちょっと休憩させていただきてえんですが……何しろ強行軍だったもんでね。」とつけ加えた。

一座はまわりに集まっている町の衆の気に入るところとなった。ところが意地悪なラ・ラピニエールという男は、もともと人をからかうことを得意にしている男で、

「服はゲーム場で今試合をしている二人の若い衆ので間に合うし、カベルヌの衣裳は普段着で十分間に合うだろう」と言った。

この言葉が終るや否やすぐさま芝居の準備にとりかかった。ものの七・八分もしない中に役者達はそれぞれ二・三杯ひっかけてから変装した。群がっていた町の衆は二階に陣取った。

汚れた敷布で作った急ごしらえの幕が開くと、役者デスタンはマットに横たわり、頭には王冠の代りに柳の小枝で編んだ小かごを被っているのが見受けられた。そして今しがた目覚めたばかりの男といった態で、目をこすりながらモンドリ風の口調で、⁽¹³⁾ 次の様な台詞で始まる エロド⁽¹⁴⁾ の役を演じていた。

“余の休息を妨げる不埒な幽霊……”

デスタンの顔半分を隠していた絆創膏は、決して彼が素晴らしい彼者であることを妨げはしなかった。又、カベルヌは、マリアンヌとサロメの二役で驚くべき演技を示した。又、老優ランキュヌは別な役で満場をうならせた。

そしてその芝居は今正に首尾よく終幕を迎えようとしていたのだが、悪魔がいつまでも眠らずいつまでもおせっかいをするので、マリアンヌの死とエロドの絶望ではなく、騒然とした拳固と口笛の音、それに床を踏みならしわめき散らす野次と怒号で幕を閉じることになった。

その後は、こうした騒ぎを治めることにかけては人後に落ちぬ、ラ・ラピニエール殿の見事なお裁きでけりがついたという次第。

第三章 一座の蒙った不愉快な結末……

当時フランス国内の田舎町には、たいていジュドポムのゲーム場があった。そして毎日町の遊び人がそこへ集まっていた。ある者はゲームをする為に、又ある者はそれを眺める為に。それに又、この遊び人共が様々な表現で神を呪詛するのもここであった。それにここに集ってくる人間は極めて残酷で隣人であろうと容赦はせず、又この場に居合せない人間なぞ毒舌でさんざんこきおろされる有様であった。

又、ここでは誰1人容赦される者はなく、全ての人間が実に厳しく生きていた。そしてここへは誰でも自由に出入りができ、神に授かった能力に応じて他人を嘲けることができた。

もし私が思い出すとすれば、ラ・ラピニエールの監督の下に、名誉ある町の衆を前にして、ラ・マリアンヌ⁽¹⁵⁾という戯曲を演じていた三人の役者を置き去りにしたままになっているのは、正にこうしたゲーム場の一つであったと言える。

騒ぎのきっかけはこうだった。

エロドとマリアンヌが論争している正にその時、勝手に服を拝借された、先の二人の若者がそれぞれ手にラケットを持って、パンツ一枚の姿で芝居をしている部屋に入ってきた。彼らは芝居を見る為に、汗をかいた体を拭きもせずそのまま入ってきた。エロドとフェロールの着ている服がすぐ目に止まったのだが、二人の中、先に頭に来た方がすぐさまゲーム場の下男の所に飛んで行き、

「この餓鬼が一、てめえなんで俺の服をあの道化に貸した」と詰問した。

この下男は相手が手に負えぬ暴れ者であることを良く知っていたので、できるだけ低姿勢で、それは自分ではないと言った。

「それじゃ一体どこのどいつだ。この寝とられ野郎のとんま野郎」とたたみかけた。

この哀れな下男は、いくら何でも目の前でラ・ラピニエールの名前を口にできなかった。しかし、このラ・ラピニエールという男は誰にも増して尊大な男であったので、椅子から立ち上り様、

「そいっあ、この俺だよ、それがどうしたい。」と言った。

「貴様か、この馬鹿野郎が」と言いながら、手にしたラケットでラピニエールの耳の所をしたたか打ちのめした。いつもなら先制攻撃をかけるのは自分の方なのに、先手を打たれて驚天し不動のままだった。驚きの為かそれともまだ十分怒りに燃えなかった為か、ともかく、例えそれが素手の殴り合いにしろ、彼が闘い始める決心をするには相当な怒りが必要であった。

ところで、事態はそれで治まっていたところなのだが、先の下男がラ・ラピニエールよりもっと頭にきて、狙いすました一撃をこの男の顔の真中に決め、体ごとぶつかっていった。

続け様に所かまわず拳固の雨を降らせた。

一方、ラ・ラピニエールは最初に攻撃された者として放っておけず、この男を背後から殴り始めた。さらにこの男の連れがラ・ラピニエールを同じように後から襲った。そしてこの連れの男はさらにラ・ラピニエールの友達の気晴しの相手にされた。

こうして次から次へと殴り合いは連鎖反応を起し、ついにはその部屋に居た全員が入り乱れての乱闘に発展してしまった。一人がののしると別な者がののしり返すという具合に、全員の乱闘になった。

家具が壊されるのを見ていた女将は悲痛な叫び声を上げた。

その時、たまたまルマンの町の数人の司法官とメーヌの町の裁判長がこのホールの下を散策していたのだが、この騒ぎを聞きつけ、このホールに駆けつけたから良かったものの、もしそうでなかったら、家具という家具

は木製の椅子、足あるいは拳固でことごとく破壊されていたにちがいない。

司法官の一人がこの騒ぎを治める為に、バケツで水を二・三杯ぶっかけてみては、と提案したが、確かにそれはききめがあっただろう。しかし二人のカプチン会修道僧を除いて、連中はそれより先に疲れ果てて、取組み合いをやめてしまった。

この二人の修道僧というのは、全くの慈愛心からこの乱闘の真只中に身を投じたのだが、そのお蔭で確固とした和平を作り出すことはできなかったにしろ、少なくとも何らかの休戦条約を結ばせることにはなった。

この休戦期間中、敵対する両陣営の間に交わされる情報は何ら妨害されることもなく、連中は自由に取り引きすることができた。

役者デスタンは喧嘩に於て並々ならぬ武勇をふるった。それは今でもルマンの町で語り草になっているのだが、この喧嘩の張本人である、二人の若者の語ったところによれば、デスタンは敵側の男をかなりな人数なぎ倒し戦闘能力を奪った後、特に二人を選んで相手になり、徹底的に打ちのめしたということである。

格闘中、デスタンの絆創膏が取れてしまったのだが、その容貌は見事な背丈に釣り合っていた。

それぞれ血で汚れた顔をきれいな水で洗い、ずたずたになったえり飾りを取りかえ、打ち身に巴布をはり、あるいはさらに細かい所を針でつくろったりした後、家具は騒ぎになる前程完璧とはいえないまでも、ほぼもとの位置に並べられた。

かようにして瞬時の間に、各自の顔つきからうかがい知れる憎しみの表情の他に、闘いの名残りを留めるものは何もなかった。

かわいそうな役者達は、最後に調書をとったラ・ラピニエールと一緒に外に出た。

丁度、ホール下のゲーム場から外に出ようとした刹那、剣を手にした七・八人の殺し屋にあっという間に取り囲まれた。

ラ・ラピニエールはいつもの習慣から判断して、少なからず恐怖にとら

われ、下手すると大変な事になるぞと感じたにちがいない。

しかし、すでにその時にはデスタンが敵の刃の前に踊り出て、体ごとくし差しにされるのではと思われる程の相手の鋭い突きを危くかわしていた。しかし避け方が不十分であった為腕にかすり傷を負ってしまった。

早くもデスタンはその時剣を手にしており、次の瞬間敵方の二人の剣は地面にたたき落され、さらに次の一刹那敵の数人は頭から血を吹き耳が裂けていた。

待伏せていた刺客達がかくも見事に料理されるのを見て、見物人達は一様に、こんな凄惨な剣の使い手は見たことがない、と感服してしまった。

かように敗北を喫した一味というのは二人の小貴族によりラ・ラピニエールに差し向けられた刺客であった。この二人の貴族の一人というのが、先にラケットでラ・ラピニエールを殴り、喧嘩の発端を作った若者の妹の夫であった。

実際、ラ・ラピニエールすんでの所で片輪者にされることを神の助けとでもいうか、かの勇敢な役者によって救われることになった。

さしも非情なラ・ラピニエールの心にも親切心が湧こうというもの。デスタンはもとより、見るも哀れな姿をした一座の連中がホテルに泊るのを見るに忍びず我が家に案内することになった。

御車は一座の荷物を下し、自分の村に引き返して行った。

第四章 この章では、ラ・ラピニエールに関する話と彼の家でその夜起った出来事が語られている。

ラ・ラピニエール夫人⁽¹⁶⁾は一行をこの上なく恭々しく迎えた。というのも、彼女はそうすることを何より好むいわゆる上流階級の女性だったからであった。

彼女は、かつて火がつくのを恐れ指でろうそくの芯を切ったことがなかったのだが、それ程瘦せてひからびた体つきをしていた、とはいうものの醜くはなかった。彼女に関してその類の風変りな話は山とあるのだが、あまり長くなるといけないので割愛させてもらう。

たちまち大の仲良しになった二人の夫人⁽¹⁷⁾は互に相手を「マシエール」
とか「マフィデール」⁽¹⁸⁾と呼び合った。

ラ・ラピニエールはもともと町の床屋の主人並に虚栄心の強い男だったので、家に入るや、誰か台所と食膳室へ行って夜食の支度を急がせるようにと命じた。

これはまぎれもない空威張りだった。というのも、馬の世話までしている年寄の下男その他、この家の召使いといったら、若い女中ともう一人年老いたびっこの、従って大変苦勞を重ねてきた女中しか居なかった。

こうした彼の虚栄心は、次の様な大いなる混乱によって罰せられる破目になる。

ラ・ラピニエール自身は通常カバレ⁽¹⁹⁾で飲み散財しているのに、あまりにもきちんと出費を決められていた為、彼の妻及び召使い達は大抵その土地の慣習に従いキャベツ入りのポタージュで済ましていた。

お客の前でいい格好をし、彼らに驕ろうとして、ラ・ラピニエールは何か夜食用に見つくるようにとの思いをこめて、召使いに小銭をいくらか背中越しに手渡そうとした。ところが主人の手違いか、それとも召使いの失策なのか、その小銭が彼の椅子の上に、椅子からさらに床にところげ落ちてしまった。ラ・ラピニエールはそれを見て紫色になり、彼の妻は赤くなり、召使いはそれを罵りカベルヌスは微笑み、ランキュヌスは恐らく気にも止めなかっただろうが、デスタンに関してはこの事が彼の心にとどろきに映ったか良くわからなかった。

小銭は拾い集められた。夜食のできるのを待ちながら談笑が始まった。

ラ・ラピニエールが

「どうして顔を絆創こうで変装しているんだ」とデスタンに尋ねた。

デスタンは

「これには訳がありまして」と言った。

「たまたま変装することになった時、ついでに敵の目をもごまかせるのではと思ってね。」と答えた。

やっと夜食が出た。うまいかまずいかは知らないが。

とにかく、ラ・ラピニエールは酔う程飲み、ランキュヌも度を越す程食った。デスタンは君子らしく控え目に、カベルヌは貧しい役者らしく、そしてラ・ラピニエール夫人も、絶えずその機会をうかがっている世の女房らしく、要は腹をこわす程たっぷり食った。

召使達が飯を済ませ床を取っている間、ラ・ラピニエールは自慢話を得々と語り一座の者をうんざりさせた。デスタンは小さな部屋に独りで、カベルヌは女中と化粧室で、ランキュヌは召使とどこかで寝た。

彼らは皆一様に眠たかった。ある者は疲労から、又ある者は食い過ぎの為に。

ところが彼らはその夜ほとんど眠れなかった。それはまぎれもない真実なのです。それ程この世の中には何が起るか知れたもんじゃないのです。

一眠りした後、ラ・ラピニエール夫人は、王様とて独りで行く場所に行きたくなり床を離れた。夫、つまりラ・ラピニエールはやがて眼を覚し、酔っていたにもかかわらずふと自分が独りで寝ていることに気付いた。

妻の名を呼んだが答えはなかった。臭いなと思ってる中に腹が立ち、怒ってベッドの上に起き上ってはみたがそれでも気がすまず、部屋の外に出てみると自分の前を歩く足音が聞えた。しばらくの間足音の方に向かって歩いて行くと、ちょうどデスタンの部屋に通ずる小さな廊下の真中あたりで、前に行く者の足音がすぐ近くに感じられたので、間違いなくすぐ後をつけていることを確信した。

そこで

「この売女が！」と叫びながらいきなり飛びかかり妻をつかまえたと思ったのも束の間、手は空を切り足は何かにつまづき、鼻を床にぶっつけ腹には何か尖った物が食い込んできた。

彼はすさまじい声で

「人殺し！」「短刀で刺された！」と叫んだ。それでもさすが、腹の下でばたばた暴れている妻の髪の毛をてっきりつかんだと思いそれだけは離さなかった。

この彼の叫び声、ののしり、おめき声に家中大騒動になり一人残らず同

時に彼の救助に駆けつけた。女中は手にろうそくを持ち、ランキュンヌと召使は汚れた下着姿のまま、カベルンヌも又非常に粗末なスカートを身につけ、デスタンは手に剣を持って、そして最後にラ・ラピニエール夫人が駆けつけた。

夫人はその場に駆けつけた人々同様、激昂した夫を見て驚いてしまった。というのも夫は、お産と同時に死んでしまった牝犬の子供に乳を与える為に家に飼っていた山羊と格闘していたからだった。

しかしラ・ラピニエール程錯乱していた者も居なかった。夫人は夫が一体何を考えているのか怪訝に思い、

「気でも違ったのですか」と尋ねた。

彼は自分が何を言ってるのかほとんど訳もわからず、

「山羊を泥棒と間違えたんだ」と答えた。

デスタンにはどういう事態なのか推察がついたが、他の者はそれぞれベッドに引き返し、ラ・ラピニエールがこの事件について主張したことをそのまま信用した。そして山羊は仔犬と一緒に閉じ込められてしまった。

第五章 この章は別に大したことを含んでいない。

役者ランキュンヌは、この小説の主要な主人公の一人です。というのもこの小説に登場する主人公は一人とは限らないでしょうから。

半ダースもの主人公達、あるいは自称それだけの主人公達は、小説の主人公程完璧なものはないし、この世には幸と不幸しかないのだから、恐らく必要最小限の事しか言及されない一人だけの主人公の時以上に私の小説を光栄なものにしてくれるでしょう。

ところでランキュンヌはあらゆる人間を嫌い、しかも自分自身をも愛せない、いわゆる人間嫌いの一人だったのです。又私はランキュンヌが人前で一度も笑ったことのないということを多くの人の証言から知っています。

ランキュンヌという男はかなり才気もあり、相当数とるに足らない詩を作っています。がしかし一面では決して名誉を重んずる男ではなく、年

老いた猿の如く意地が悪く、又犬の様にねたみ深いところがあります。

彼は自分の職業に関しては何事につけ口うるさく言ってきた。ベルローズは大げさ過ぎた、モンドリーは気性が荒かった。フロリドールは冷酷過ぎた⁽²⁰⁾とか他の人間についてもかような文句を言ってきた、そして彼はいつも気軽に自分は欠点の無い唯一の役者だと決めこんでいたようだった。しかしながら役者としては年を取り過ぎてしまったという理由だけで一座では認めてもらえなかった。

アルディの作品を上演せざるを得なくなった時など、乳母の役を裏声で仮面をつけて演じた。新しい芝居が流行し始めてからは、彼は木戸の見張人だったが、王につきそって誰かを捕えたり、殺害したりあるいは戦闘場面の必要な時、打明け話の聞き役、大使、執達吏補佐人等の役として出演したこともあった。又歌を歌う場面では三重唱の一員として、バスとテノールの中間の声で歌ったし、フェルスをやる時は顔に隈を作り老け役をやったりもした。

彼の度し難い虚栄心は正にこうした見事な才能の上に築かれておりしかもそうした虚栄心が、不断に冷やかしかきで疲れを知らぬ中傷好きな、しかも喧嘩好きな、とは言っても何らかの価値に裏打された気性と結びついていていた。

その為一座の仲間には畏敬されていたのですが、一人デスタンに対してだけはまるで子羊の如く優しくかったし、デスタンの前では、彼の性格が許容する範囲内で分別ある人間らしくふるまっていた。彼はデスタンに打ち負かされたんだという風評も無くはなかったが、こうした噂は、ひどい場合はこっそり失敬してしまう程に強烈な他人の財産に対する愛着心の噂同様長続きはしなかった。

こうした性格はともかくとして、要するに彼はこの世で最高にいい奴だった。

ところで彼はラ・ラピニエールの召使と一緒に寝たと申し上げたように思うのですが、この召使の名はドオーガンといいます。

彼の寝たベッドが良くなかったのか、あるいはドオーガンの寝癖が悪か

った為か、とにかく彼はその夜一睡もできなかった。夜も明けやらぬ中に、主人に呼ばれたドオーガンと同時に起きた。ラ・ラピニエールの部屋の前を通りかかったついでに、彼に朝の挨拶をしに寄った。ラ・ラピニエールは田舎の警察長官を気取ってわざと大ように挨拶を受けた。そして自分の受けた敬意の十分の一の礼も返さなかった、が役者というのはあらゆる種類の人間を演じているので大して動揺もしなかった。

ラ・ラピニエールはランキュヌに、芝居について次から次へと（このいいまわしはここでは正にぴったりに思われます）色んな質問をした。そして最後にいつからデスタンは一座に居るか尋ねた。又デスタンがすばらしい役者だともつけ加えた。

ランキュヌは

「輝くもの必ずしも金とは限らぬ」と応じた。さらに続けて

「私が主役を演じていた頃など、奴はまだほんの小姓役でしたよ、修業も積んだことのない奴にどうしてりっぱな役者がつとまりましょう。奴はまだ一座に入って間も無い訳で、そう簡単にいっぱしの役者になれる道理がありませんよ。奴は若いだけに受けているんですよ。私位奴について知識がおありなら、奴への評価は今の半分以下になりかねませんがね。それに奴はあたかも良家の出身らしく偉そうにしていますが、その実どこの誰兵衛とも明かしちゃいねえんですから。それに奴に付き添い、奴の妹と称している美人のクロリーという女も同じことでさ。奴の妹であるよう祈ってますがね。」とさらに続けて

「あっしは御覧の通りのつまらん人間ですが、パリで二ヶ所に深手を負いながらも奴の命を助けてやったのですが、その恩さえすっかり忘れくさって、あっしが四人がかりで外科に担ぎこまれる時も一緒にくるところか、奴の話じゃ、その夜あっしらを襲った連中が奴から奪ったというダイヤモンド、いやそれもどうせアランソンのまがいもの⁽²¹⁾にちげえねえんですが、そいつを捜しに泥の中を一晩中ほっつきまわってた位ですから」

「その災難に出くわしたのはいつかね」

とラ・ラピニエールは尋ねた。

「公現祭の日、ポンヌフの上でさあ」

とランキュンヌは答えた。とりわけこの最後の言葉はラ・ラピニエールとドオーガンを少なからず動揺させた。二人は交互に青くなったり赤くなったりしていた。その後すぐラ・ラピニエールが大いにあわてて話題を変えた為、ランキュンヌは驚いてしまった。

その時、町の死刑執行人とラ・ラピニエールの部下である捕方役人数人が部屋に入って来たので話はそこで中断され、ランキュンヌはほっと一息つけた。というのも、ランキュンヌは自分の話が、明確にどの部分かは見抜けないまでも、ラ・ラピニエールのどこか弱身を突いていたことだけはまぎれもなく感じた。

一方話題に上っていた哀れなデスタンは、その時大変な苦勞をしていた。ランキュンヌはカベルンヌと一緒にいるデスタンを見つけたのだが、デスタンは老仕立師に、注文を聞き間違えた上に仕立方を間違えたことを納得させようとやっきになっていた。

そもそもいさかいのもとになったのは、一座の衣裳荷物を解いた時、デスタンは着古しの二着の胴着と、半ズボン一本を見つけ、それをこの老仕立師に預け、彼が目下身につけている小姓用の半ズボン⁽²²⁾よりもっとモダンな型に作り直すよう注文していた。

ところがこの老仕立師は胴着を一着つぶし、別な胴着及び半ズボンを修繕するように言われていたにもかかわらず、どうしたものか古着修繕一筋に生きてきた男らしくもない判断の誤りから、半ズボンをつぶして胴着二着を繕ってしまったという訳。半ズボンが益々減り胴着が益々増えることになったデスタンは、やむなく部屋に閉じ込めるか、それとも外に出てもうすでに奇妙な形をしていることで慣れっこになっていたのだが、子供達に囃し立てられる破目になるかどちらかにせざるを得なかった。

気前の良いラ・ラピニエールがこの仕立師の失敗を償った。仕立師は繕った胴着二着をもらいうけ、デスタンはそのかわりに、今しがた車責めの刑⁽²³⁾に処せられた追い剥の衣服を支給された。その場に居合わせた死刑執行人はラ・ラピニエールの召使にその衣服を保管させていたのですが、

横柄な口調で

「その服は俺のもんだ」と異議を唱えた。

しかし、ラ・ラピニエールが、文句を言う奴は首だ、と恫喝しそれだけで済んだ。

服はデスタンにほぼぴったりだった。デスタンはラ・ラピニエール、ランキュンヌと共に外出した。彼らはあるカバレでラ・ラピニエールと通じている町の顔役のおごりで一杯やった。

カベルヌスは久方ぶりに汚れた服のえりを洗濯した後、ラ・ラピニエール夫人の相手をした。

ちょうどその日のこと、前日賭場で打ちのめされた若者の一人がその恨みを晴らそうとドオーガンを奇襲し、ドオーガンはその為ニケ所に深手を負った上にひどく乱打されやっとの思いで家にたどりついた。

ランキュンヌは怪我人の側に寝る訳にもいかず、夜食を済ますと隣の旅籠に泊まりに行った。それも仲間のデスタンとそれに頻死の重傷を負わされた自分の従者の恨みを晴らそうとするラ・ラピニエールと連れだって、町中ほっつきまわった結果旅籠についた時はぐったり疲れていた。

第六章 尿瓶事件、旅籠がランキュンヌより蒙った 不幸な夜、一座の別の一隊の到着。ドオー ガンの死及び忘れ難い事件の数々。

ランキュンヌはほろ酔いに少しまわった程度で旅籠に入った。ラ・ラピニエール家の女中がそこまで案内してくれ、旅籠の女主人に床を取ってくれるよう頼んでくれた。

「今ちょうど満員なんだがね、⁽²⁴⁾ こちら様の為に他のお客を犠牲にするゃこっちが損するしねえ」と女将はしぶった。すると主人の方が

「この馬鹿たれが、おめえは黙ってろ」と女将をしかりつけ

「ラ・ラピニエール様といやこちとらにとっちゃこの上ない名誉なお方だ、さあこちらの旦那に床を取ってあげな」と命じた。

「そりゃそうかもしれないが、一体ベッドがどこにあるんだろうね」⁽²⁵⁾

一つきりしか空いてなかったのも今しがたメーヌの下町のある商人に貸しちゃったとこだしさ」と女将は愚痴った。

その商人というのが顔を出し、すっかりその場の事情をのみ込んだ上でランキュンヌに自分のベッドの半分を提供すると申し出た。

それもラ・ラピニエールと係わりがあったからか、それともその商人の生まれつき親切な気性がそうさせたのか定かではないが。

ランキュンヌは無愛想な男としては勢いっぱいその男に礼を言った。

商人は夜食を取り宿の主人は彼の相手をしたのだが、ランキュンヌも三人目の仲間入りするのを二つ返事でひき受け改めて飲み直し始めた。

三人は税金の話をし、収税請負人をののしり自分の事は棚に上げて国家の悪口をさんざん言った。

宿の主人が先づ最初に、自分の家で飲んでることも忘れてポケットから財布を出し、勘定はいくらだ、と言った。彼の妻と女中が彼の肩をつかんで部屋にひきずり込み、服を着たままベッドに寝かせた。

ランキュンヌは商人に

「小便が出難いので困ってるんですよ。やむを得ず迷惑をかけちまうだろうが、まあ勘弁して下さいよ。」とあらかじめ断った。

「夜はすぐ明けちまいますさあ」と商人は応えた。

彼らのベッドは壁との間に全くすき間が無く、壁にぴったりくっついていた。ランキュンヌが先にもぐり込み商人が後から、つまり好い場所を占めた。ランキュンヌは彼に尿瓶をくれるよう頼んだが、

「一体どうするつもりだ」と商人が言うので

「あんたに迷惑をかけたかないので自分の傍に置いときたいんでさあ」とランキュンヌが答えた。

「必要な時には渡しますよ」と商人。

それでもランキュンヌは彼に迷惑をかけるのにしのびないからと言ってなかなか同意しませんでした。商人の方はもう相手にならず眠ってしまった。商人がぐっすり寝つくや否やこの意地の悪い役者、というのも、彼は他人の片目をつぶす為なら自分の目さえつぶすような男でしたから、こ

の哀れな商人の腕をひっぱりざま叫んだ。

「旦那あ、もし旦那あ」と。すっかり寝込んでいた商人があくびをしながら

「一体何の用で」と尋ねると、ランキュンスは

「ちょっと尿瓶が欲しんですが」と言った。商人はベッドの外へ体を乗り出し、尿瓶を取り出し小便しようと待ち構えているランキュンスの手に渡した。

ランキュンスはさんざん苦勞をした後、あるいは苦勞したかに見せかけた後、自分の不幸をぶつぶつ口の中でぼやいたり、不平を言ったりしてからついに一滴の小便もせず尿瓶を返した。商人はそれを床にもどし、まるでかまどの口程もあろうかと思われる位大きな口を開け、あくびをしながら

「全くお気の毒なことで」と言うなり寝ついてしまった。

ランキュンスは商人を深い眠りに誘い込んでおいた後、商人があたかもいびきをかく為に生まれてきたかと思われる程のすごいいびきをかき始めるのを見定めてから、この不実な男は又もや商人を眠りから覚まし、前と同様意地悪く尿瓶を要求した。商人は前と同じように素直にそれを彼の手に渡してやった。

ランキュンスは商人を眠らせたくなかったので、小便もしたくなかったのに用を足すようあてがった。そして以前より大声で、又二倍も時間をかけ、小便もせず、

「わざわざ取ってもらわなくともいいですよ。」とか

「それじゃ筋が通らねえからあっしが自分でやりますから」と言って商人にからんだ。

哀れな商人はその時ぐっすり眠る為なら全財産すら与えたでしょうに、相変らずあくびをしながら

「自分の気に入ったようにやってるだけですよ」と言ってもとの場所に尿瓶を返した。

二人は就寝前の挨拶を丁寧に交わした。哀れな商人はもし生涯を通じて

最高の眠りがかなうなら自分の全財産すら賭けたでしょうに。どういふ結果を招くか承知の上で、ランキュンヌは商人を前より一層深く眠らせておいた後で、それ程よく眠っている男に対して何のためらいもなく片方の肘を商人の水落ちにあてがい、体ごとのしかかりもう一方の腕をベッドの外へ延ばした。地上にあるものをちょろどかき集めるような格好で。

不運な商人は息苦しく胸が押しつぶされるような気がしてはっと目を覚ますなり、恐ろしい悲鳴を上げた。

「ひえー、何をする気だ、あんたという人は、殺す気か」

商人の声が大きかっただけに、ランキュンヌは一層声を和らげ落ちついた声で答えた。

「誠に恐れ入ります、つい尿瓶が欲しかったもので」

「あーあー、一体何て事だ」と商人。

「そんな事される位なら取ってあげますよ、例え一晩中眠れなくたってね、とにかくあんたは生涯忘れることができない程ひどい目にあわせてくれましたよ。」

ランキュンヌはそれには一言も答えず、激しい音と共に一気に小便をほとぼしらせた。あまりの激しさに、尿瓶のたてる音だけでもひょっとしたら商人が目覚めたかもしれないと思われる程だった。

極悪人の偽善という奴で、神に感謝しながら、ランキュンヌは尿瓶を満たした。

かわいそうな商人は、もうこれで眠りは妨げられることもないだろうという期待から、ランキュンヌの溢れんばかりの小便にできる限りの祝福の辞を述べた。ところが一方ランキュンヌはその尿瓶をもとの場所に返そうとみせかけて、偽善者よろしく

「これはこれは旦那、すまんことで」と叫びながら商人の上にそれを落してしまった。

尿瓶もそしてその中身ももろ共に、商人の顔から口ひげ、そして腹にかけて飛び散った。

「ああこれはこれは旦那申し訳ない事で」

というランキュンヌの儀式ばった言葉に商人は言い返す言葉もなかった。

それどころか小便を浴びたと気付くや否やさっと飛び起き、激昂した男の様なうなり声を発し、ろうそくをくれと言った。

片やランキュンヌは、テアト教団の修道士を誘導して神を冒瀆する⁽²⁶⁾言葉をはかせる程の冷静さで、彼に

「これは又とんだことに……」と言った。

商人の方はまだどなり散らしていた。

そこへ宿の主人、女将、女中、下男等が駆けつけてきた。

商人は彼らに向って言った。

「俺は悪魔と一緒に寝かせられたんだ。頼むからこいつをどこかで焼き殺してくれ。」と

「一体どうしたというんですか」と尋ねられても彼は何も答えなかった。それ程彼は怒りに燃えていたので、衣類と小間物を抱え、体を乾かしに台所に行った。火の側に長椅子を置き、その上で夜を明かした。

宿の主人がランキュンヌに、一体彼に何をしでかしたのかと尋ねると、ランキュンヌは全く無邪気に装いながら、

「一体何について不平を言ってるんでしょうね、あっしにはさっぱり合点のいかぬことでして……要は旦那が目覚ますなり〴〵人殺し、と叫んであっしを起したんでさあ、恐らく悪い夢でも見たかそれとも気が変になっちまったか、どっちかにちげえねえんですよ。その証拠に旦那はベッドの中で小便を漏らしちまったんですから」と答えた。

女将はベッドに手をやって言った。

「本当だわ、マットレスの下まで通っている。このままじゃ済まさないから、必ず弁償させてやるからねえ」と断言した。

彼らはランキュンヌに挨拶し出て行った。

一方ランキュンヌはまるで善人よろしく朝まで安らかに眠り、前の晩ラ・ラピニエール家での寝不足を一挙に取り返した。

ところが、自分で思ったより早く起きた。というのもラ・ラピニエール家の女中があわてふためいて彼を迎えに来たからだ。女中が言うに

は、ドオーガンが危篤で是非とも息のある中に一度ランキュヌに会いたいということだった。

今にも息を引きとろうとしている男が、しかも昨日知り合ったばかりの男が彼に何を言いたいのか非常に気になって、ランキュヌは急いで駆けつけた。

ところが女中があわてもんで、危篤の病人が役者に会いたがっていると聞き、ランキュヌとデスタンを取り違ってしまったのである。

ランキュヌが到着した時、ちょうどデスタンがドオーガンの部屋に入ったところだった。デスタンはドオーガンの懺悔を聞いた司祭から、ドオーガンがデスタンに是非とも重要な事を話したがっているということを知り、ドオーガンの部屋に閉じ込められた。

デスタンが部屋に入ってもものの七・八分もしない中にラ・ラピニエールが町から帰ってきた。彼は夜の明けやらぬ中に何か用があって町まで出かけていた。家に着くとすぐドオーガンが動脈が切れており、止血が不可能の為危篤状態であること、さらに息のある中に役者デスタンに面会を求めたことを知らされた。

「それで会ったのか」とラ・ラピニエールは興奮して尋ねた。

「今ちょうど二人一緒に部屋に居るところです」と知らされた。

この言葉を聞くや、まるで棍棒でぶん殴られた程の衝撃を受けた。すぐさま我を忘れて駆けつけドオーガンの部屋の扉をノックした。デスタンが、病人が気を失ったから誰かすぐ来てくれるようにと急を知らせる為ドアを開いたのと同時だった。

ラ・ラピニエールは全く取り乱して、彼の気のふれた従者がデスタンに一体何を言ったのか詰問した。デスタンは

「うわ言を言ってるんじゃないですか」と冷静に応えた。

「と申しますのも、彼は私に何度もくどい程詫びをいいますので、私はいっこうに彼に傷つけられた覚えがないんですが。とにかく気をつけてあげてください。危篤状態です。」

今正にドオーガンが最後の息を引きとろうとする時、皆ベッドの側に寄

った。ラ・ラピニエールの表情には悲しさよりむしろ喜びの色が感じられた。彼を良く知る者の目には、きっとドーガンの給料がたまっていたからだろうという風に映った。

一人デスタンのみがそれをどう解釈すべきかよく心得ていた。

ちょうどその頃二人の男がこの家に到着した。彼らはわが役者達によって彼らの仲間であることが確認された。彼らのことについては次章で詳しく語ることにしたい。

〈未 完〉

訳 注

- (1) 《Ce début est une parodie des romans de l'époque. Déjà Théophile s'était moqué, dans les *Fragments d'une histoire comique*, des descriptions faussement poétiques par où les romanciers avaient coutume de commencer leurs récits. On sent plus particulièrement, dans Scarron, le souvenir du style burlesque.》(A. Adam. *Romanciers du xvii^e siècle*. pléiade 版. p1419) (以下 Adam pléiade と略す。)このアダムの文章からも窺えるように、当時、ロマンは散文で書かれた叙事詩的色彩を帯び、作家達は詩神に対して献辞を述べ詩神の御機嫌を伺うのが常識だった。*Le Roman Bourgeois* の作者 Furetière もそのロマンの冒頭で

《……Mais puis-qu'un roman n'est rien qu'une poésie en prose, je croirais mal débiter si je ne suivais l'exemple de mes maitres……》と先人の躰にならわないことへの決意表明をしている。少なくともスキヤロン、フルティエール、ソレル等にあつては、従来の小説作家達とは全く別の位相から出発していることは明白である。

この出だしの状景は、アポロン神が翼を持った天馬ペガサスに引かれた馬車に乗り、天上の軌道を駆けている様を描いたものだが、天馬もアポロンも詩神の対象からひきずり下ろされていること、及び敢えて詩神への献辞をこの様に表現した所に、Burlesque な詩人スキヤロンの名残りを見ることができよう。

- (2) 1568年に建設された木造建築。
- (3) 本文中、もっと後でこの理由が明かにされるが、十七世紀にあつては、敵の目をくらましたり、人に顔を見られたくない時絆創膏を使うのが習慣になっていた。
- (4) 原文《Il portait des chausses troussées à bas d'attache……》chausse は女性用のブルーマにも似た半ズボン。bas d'attache は紐のついた腰まである長いストッキング・当時は芝居用にしか使われず、流行遅れもはなはだしい代物であった。

- (5) 原文《Tripot de la Biche》H. Chardon が *Scarron inconnu* (p.197) の中で、公正証書の原文を引用しつつ論証したところによれば、当時 Le Mans の町には《jeu de paulme》の遊戯場は全て Biche (牝鹿) の看板を出していたと言われる。《jeu de paulme》とはしゃもじに似た木製のラケットでやるテニスと卓球のあいのこのようなゲーム。

訳者は昨年スペイン旅行中、サンセバスチヤンの海水浴場でこのゲームが遊び半分に行われているのを見た、がフランスではついに見かけることはできなかった。又、Biche の看板の名残すら、H Chardon 同様 Le Mans で発見できなかった。

- (6) 原文《un lieutenant de prévôt》prévôt の項目を Furetière 辞典 (以下 Furetière) で見るとざっと以下のようなものである。

① Grand prévôt de l'Hôtel (ou de France)

王家の治安及び裁判を司る帯剣司法官。

② Grand prévôt de la Connestable

フランス陸軍の憲兵司令

③ Prévôt Général de la Marine

フランス海軍の憲兵司令

④ Prévôt des Maréchaux

この中には Corps de la Gendarmerie, 及び lieutenant des Maréchaux de France が含まれるが、特に後者は地方の治安維持に主として当たり裁判権も有していた。

⑤ Prévôt, Garde des Monnaies

偽金の製造を取締る。

⑥ Prévôt des Marchands

地方都市の行政、治安並びに港、海、河川よりの収税を任されていた。

ところで、lieutenant de Prévôt というのは、④⑥の項目に相当する役人の直属の部下であると思われる。というのは本文のすぐ後に、《Magistrat》が付加されており、同じく Furetière によれば、地方都市の行政、治安維持を司る役人とあるのでいわば Intendant (地方総監) に似た役人の部下であると思われる。がしかし、Intendant と Prévôt の関係が不明である為、具体的な役目の内容を推量できない。しかし大旨今日でいう、地方の警察長官、検事、さらに地方裁判所長官位の権力を併せ持った役人の直属の部下であろう。

- (7) この小説に登場する人物はその名前が一風変っているのが特色。ちなみにデスタン (運命) ラ・ラピニエール (Rapiner……職務を利用して私腹をこやす。から来たことは明白) ランキュンヌ (恨み) カベルンヌ (洞穴) と言った具合。
- (8) 《……Les poètes satyriques sont des rieurs qui se moquent de tout, qui se raillent de tout le monde: Les débauchés sont des rieurs,

des gens de plaisir, qui n'aiment qu'à passer le temps, qu'à se divertir.》
(Furetière)

- (9) オランジュ公一座は1618年にブルターニュで、1620年にリール（パリ北部フランドル地方）で名をあげ1620年、1624年にパリに帰還している。この一座は当時フランス国内で最優秀の一座に入る。又この一座はオランダ、ドイツをまわって芝居を打ち、パリに帰った時はブルゴーニュ座を借りている。創立当時の座長は、パレランールコントで、座員には、ラポルト、ルノワール、モンドリ（本文中に出てくる役者）あるいは未来のル・シッドの作者コルネイユ等多士落着だった。）Adam Pléiade p. 1420)

片やデペロン一座についての詳細は不明だが、モリエールの盛名劇団《L'illustre Théâtre》が興業に失敗した時一時身を寄せていた劇団と言われている。1645年当時の座長はシャルルデュフランスで、本拠地はボルドー。
(ibid 並びに E. Magne 編 classique garnier 参照)

- (10) Intendant は「パスカル」（アンリルフェーブル・川俣晃自訳）では〈検察官〉と訳され「パスカルとその時代」（中村雄二郎）では〈地方総監〉と訳されているが、物語の年代を考慮し、かつ又封建領主制下に於ける地方自治を司る役人として、日本語にふさわしい言葉は〈代官〉が最も適当と考えた。
- (11) ロワールの北方にあるサルト（Sarthe）内の小都市。
- (12) 原文《Que le feu saint Antoine les arde!》le feu sain Antoine は別名 Mal des Ardents と呼ばれ、lépre の一種とみなされていた。

この病気は体の外部に表われる前に内部に燃焼を起す病気と思われていた。そこで火あぶりというより、体の中を焼き尽すという意が込められている。
(Furetière)

- (13) 注(9)参照。
- (14) 出しものは Tristan l'Hermite (1601～1655) の《La Marianne》であり、エロド（Hérode）役はモンドリ（Montdory）の当り役
- (15) 注(14)参照。
- (16) 原文《Mademoiselle de la Rappinière》となっている。しかし明かにラ・ラピニエール夫人であることは明白。しかし由緒ある貴族の奥方にのみ与えられた“Madame”の称号を作者はこの夫人には与えていない。

H. Chardon 《Scarron inconnu》によれば当時、Le Mans に実在した François Nourry が La Rappinière のモデルと考えられ、又夫人は Elisabeth という女性だと推論している。

- (17) 原文《deux dames》だが、一人の dame は Mademoiselle de Caverne であり、一人は La Rappinière 夫人である。前者は本文の後半で娘が一人いることが判明するので dame であることがわかる。
- (18) 原文《ma chère et Ma fidèle》

“ma chère” は特別親しい女性に対しての呼び方で“親愛な人” “いとしい人” “といった意。“ma fidèle” も“私の信頼できる人” といった意。だが日本語にすると語感を表現しにくいので原語のままにした。

- (19) 今日でいうキャバレー (cabaret) とは異なり、むしろ居酒屋 (taverne) に近い。カバレ (cabaret) では酒しか飲めず、食事はできなかった。又酒も混ぜ物が多く、客も町の遊び人が多かった。もっと静かに酒を飲み、食事もしたい連中は居酒屋 (taverne) の方に行った。詳しくは (Furetière) 参照。

- (20) ランキュンヌはここで、タールマン (Tallemant) の説に同調している。
(Adam. pléiade p.1421) モンドリーは注の(9)参照。

ベルローズ (Bellerose) はブルゴーニュ座の座長、又・フロドールはマレー座に一時いた役者ブルゴーニュ座に移った。

- (21) 当時アランソン近辺で採掘されるダイヤモンドは全て偽物であった。アランソン近辺の大地は、輝く砂と灰色の硬い鉱石でできていた。そこで採れる偽のダイヤモンドは、大きいので鶏卵位の大きさがあつた。本物と同じ位精巧で輝きも見劣りのしないものであつた。(Furetière)

- (22) 《Les chausses de page》appelès aussi grègues, troussees ou culottes, étaient des espèces de faut-de-chausses d'ancienne mode, serrés et plissés. Abandonnés au XVI^e siècle, ils étaient, à l'époque de Scarron, réservés aux pages. (Adam. Pléiade pp.1421~1422)

- (23) 追剥に加える刑罰で、車輪の上に仰向けに縛り、手足を折りそのまま放置しておく。

- (24) 原文 《Voici le reste de notre écu》Leroux: 《Ouand on voit venir quelque importun dans une compagnie, on dit “Voici le reste de notre écu”》(ibid)

《On dit aussi de ceux qui surviennent en une compagnie, et qu' on n'attendait pas, “Voici le reste de notre ècu”》(Furetière)とあるが、要するに、歓迎されない客が来た時使われる慣用的表現である。日本語としてどう表現するか、時と場所によって色々あると思うが、文脈から判断して本文のようにした。

- (25) 原文 《Voire qui en aurait》これも古い慣用句と思われるが、(Furetière) は Voireを《Terme populaire et ironique) と言っているから “なる程そりゃそうかもしれないがね” 位の意と思われる。後に続く《qui en aurait》の慣用的用例が見当たらないので、やむをえず本文のように意識を施した。

- (26) 原文 《de faire renierun Théatin》: d'amener un religieux de l'ordre des Théatins á prononcer des jurons tels que “Jarnidieu” (je renie dieu) (A dam pléiade p.1422)